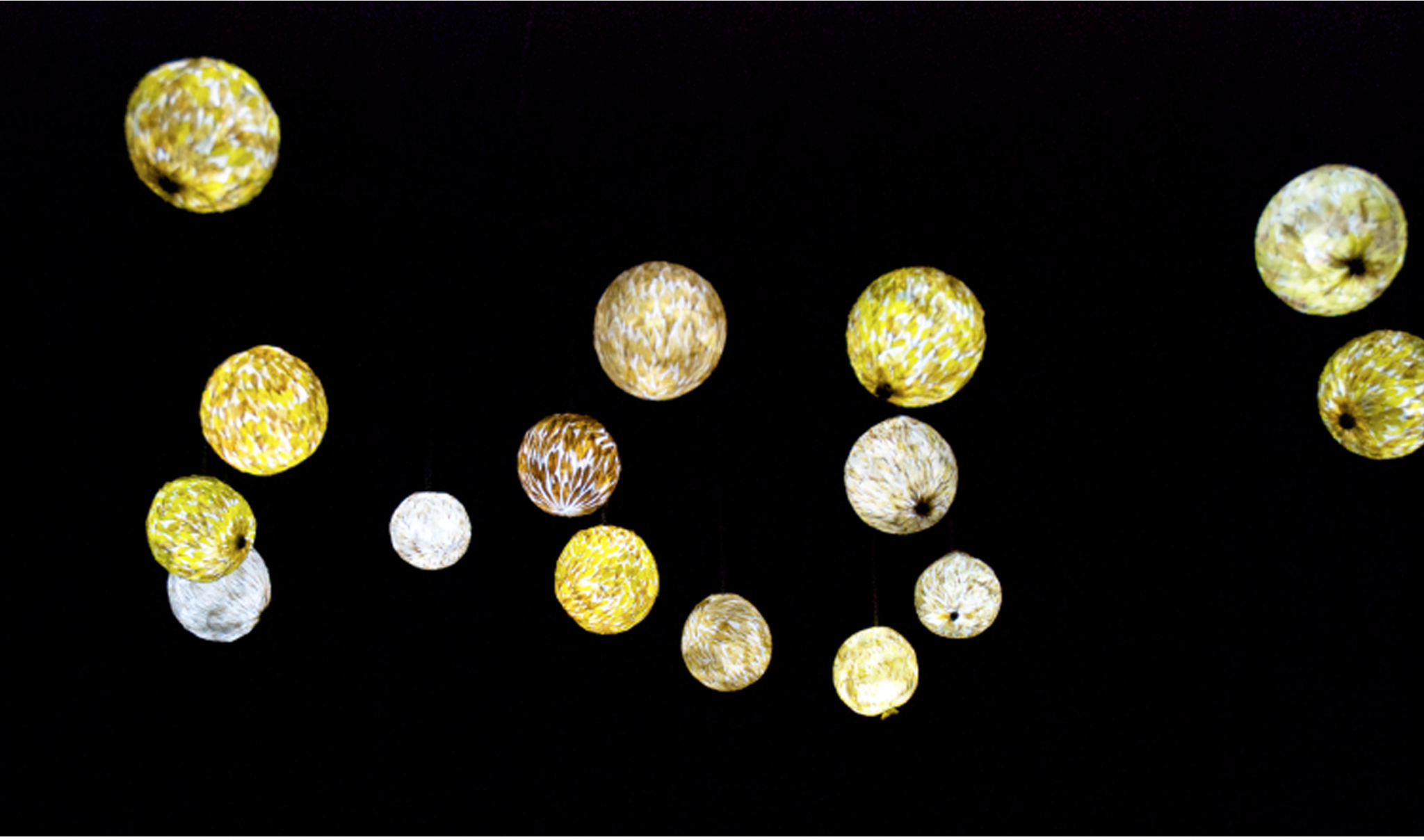


自身の作品を振り返ると、その共通点が「光」であることに気づきました。
作品の中で大きな役割を担っているのは「LED+光」。

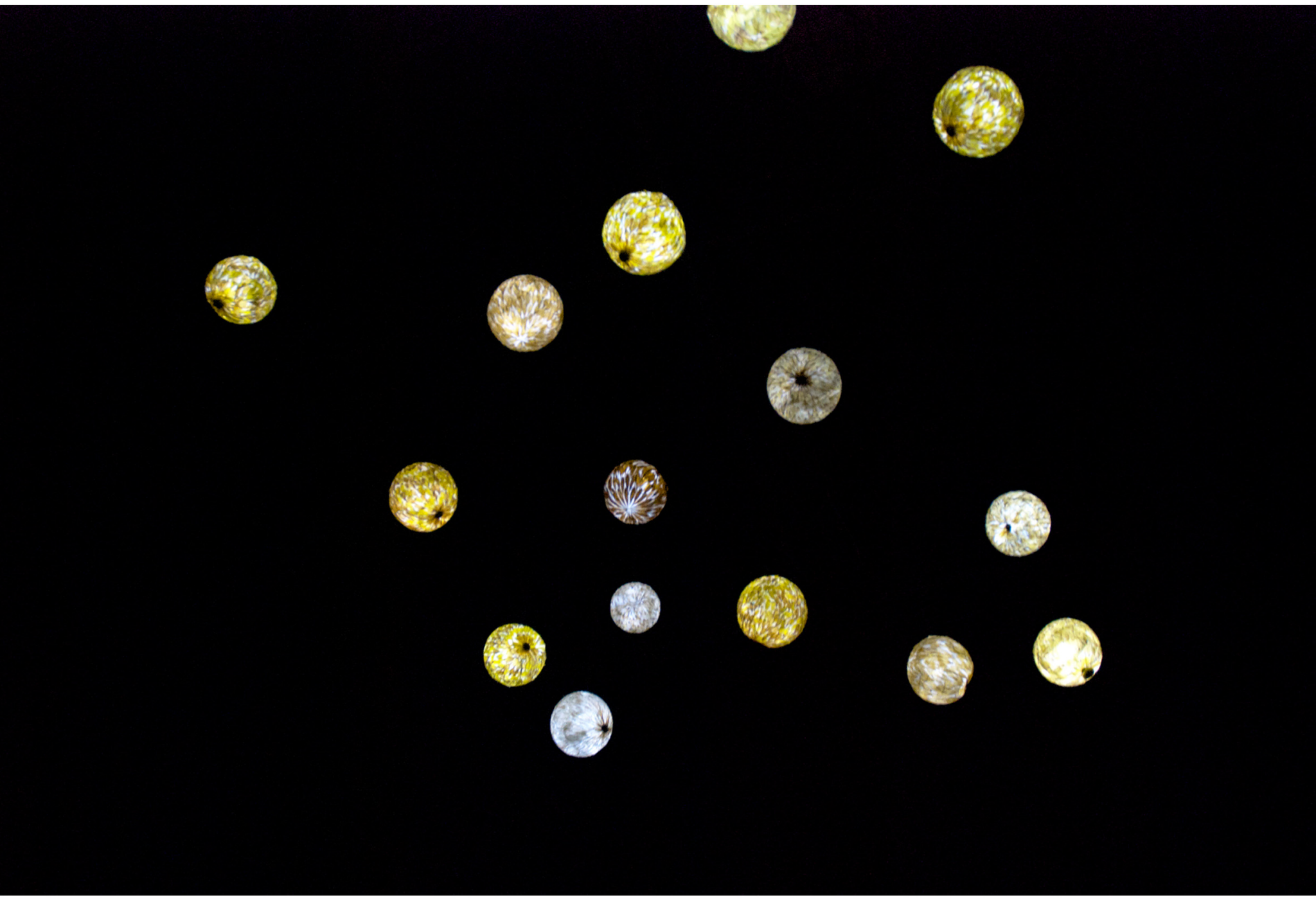
しかし、私は「闇」の体験をきっかけに今まで目を向けていなかった「闇」という存在に注目しました。
考えれば当然の話だが、「光」があればついの存在として必ず「闇」があります。
私は今まで、表の存在ともいえる「光」を主人公として扱い、作業していました。

私にとって「闇」は背景のような意識していない存在でした。
そこから「闇」の存在に気づき、考え始めました。
そして、「闇」をテーマとし「Blooming Heart」を制作しました。

私は、この作品は、一見恐ろしく感じる「闇」だが、逆に安らぎをもたらす事もできる存在として
制作。先日ギャラリーにて「Blooming Heart」展示を行いました。
ある鑑賞者は闇の中で一時間ほど椅子に座り作品を観賞していました。
決して短くない観賞時間に、その鑑賞者は何を思っていたのか。
少なくとも、そこでは「闇」恐怖と感じてはいないようにみえました。
まるで、子供の頃、見上げた「闇」の星空をみているようで。

私は闇と光の大事さ。
我々が造り出す明暗の空間に注目しています。
LED電球の「光」からはじめ、第２の主役「闇」と共にする空間を作りたいです。

私が今まで続けている作品の多くは「暗黒の中の光」です。
例えば、「闇の中の影映像」、「闇のLED電球」、「闇：光の残像」を制作しました。
このようなテーマで展示した際、「暗い空間に入りにくい」という鑑賞者の感想を受け取りました。
その多くは恐怖感から来るものであると推測します。
ほとんどの観賞者は暗い空間と明るい空間の間になにかしらの境界を感じたかのように、
不安感に駆られる姿を見せました。
「闇：光」の間には大きな隔たりがあり、そこに恐怖を感じたのではないかと考えています。
思い起こせば、私も初めて体験することには恐ろしさを覚えます。
鑑賞者が、初めて体験する暗闇に足を踏み入れることを恐ろしいと感じるのは当然の事であります。
しかし、一度体験すれば、その恐怖は取り払われます。
予め説明したが我々は闇に慣れていないということだけです。
昔は電気も何もない漆黒の闇を賢く過ごしました。
もちろん電気のおかげで便利な生活ができる我々だが、
時々闇の中でわが身を省みる機会があればいいと思うことがあります。



2011 Blooming Heart
5300X3500X1700 LED電球，Aruduino，MaxMsp

修士卒業作品として作っている作品「Blooming Heart」です。
直訳すれば「花が咲けるという」、
アメリカや西洋では人の心を伝える意味でBlooming Heartを花とともによく使います。

私達は夜、空を見上げる時、月はずっと存在しているにも関わらず、
目に見えるかどうかで月があるかないかを判断します。

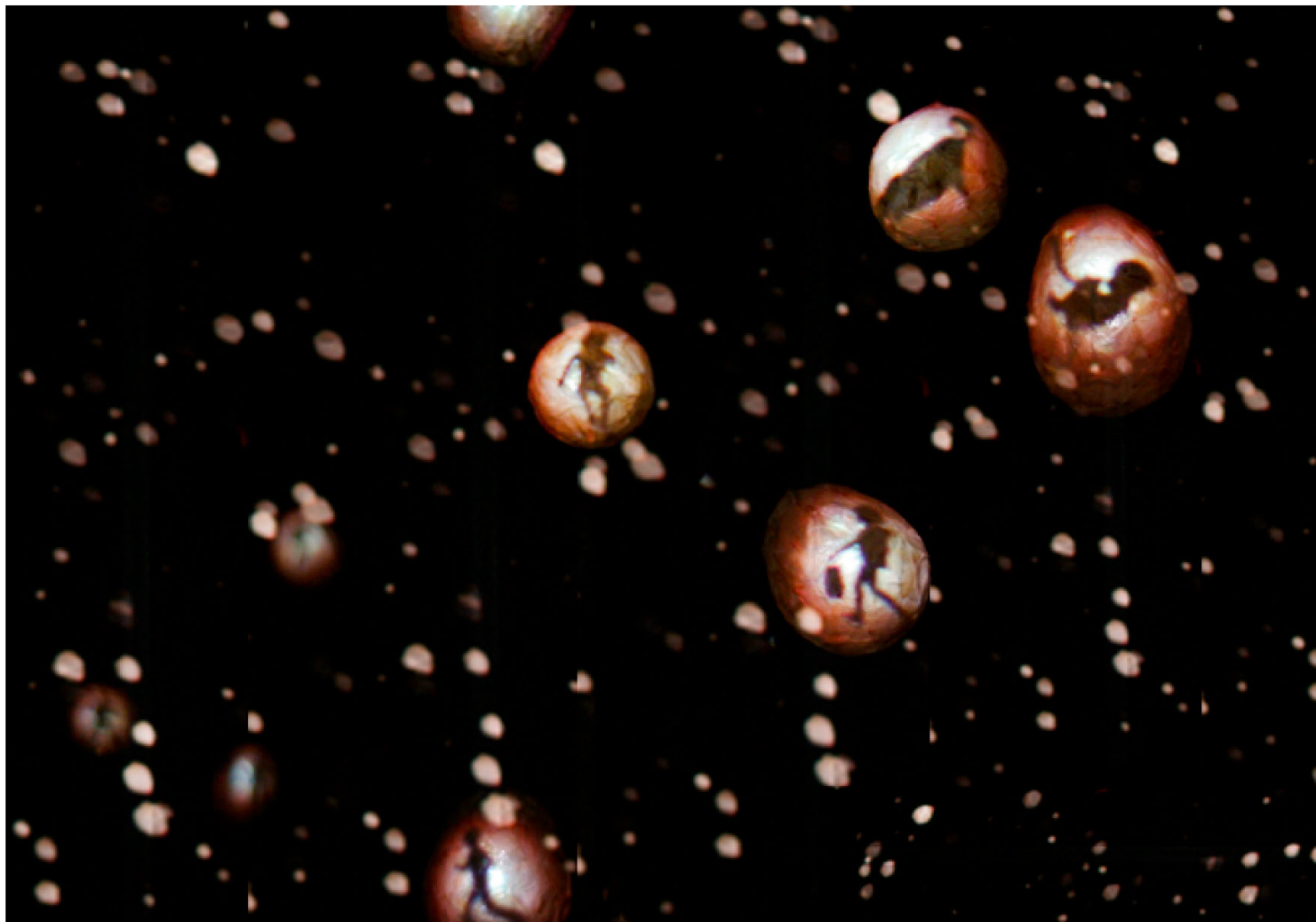
私達が見ている「A」という世界と同じ線上に目には見えない「B」の世界も存在していること。
目に見えるモノが全てではない。
一方（A）があるから他方（B）も存在しうる。
相互関係が成り立つからこそ両者は存在出来るのである。

闇の空間の中で分けた２つの花畑があります。
LED電球で出来上がるこの空間は人と疎通する道になり、周りにあるモノ全てとつながる私。
これらは個々の物ではなく、周りの生命とつながり、一つの宇宙となる。
この花は土から育つのではなく、空・宇宙によって育つ。 母胎となる宇宙、生命の自我である。
一つ一つの花びらによって作られています。

この花は咲く、落ちる、といった目に見えるものだけではない一つ一つが自分自身の自我を示している。

光とオブゼ「桜の木」

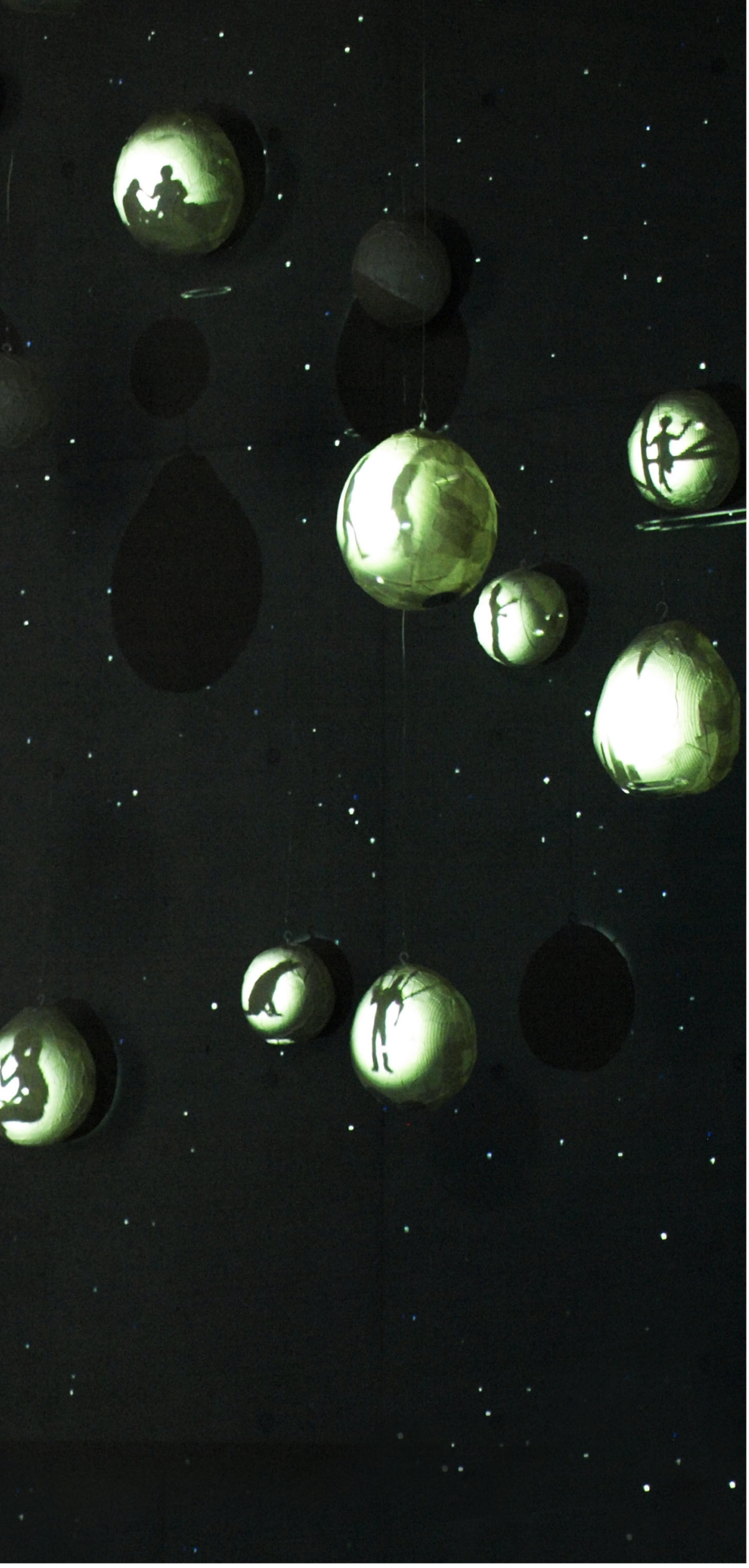
「桜」を選んだ理由は夜にも美しいという事であります。
５月日本での年中最大休日「ゴールデンウィーク」の時、私は留学生という立場
故家族との連休にまた学校に行きました。
特にあの時期にはまだ個人的な事もあり、限りなく広がった青空が嫌いでした。
夜になり、学校を出て目の前にある桜の木をみた瞬間何も考えずにただあの風景に癒されました。
夜の闇のなかで見た桜はどんな桜よりも美しいと思いました。
「死」という悲しみやつらい記憶も時間経ち、段々強くなる自分を振り返り作りました。
闇の中であんなに綺麗に私を見守る桜の木を見ながら
私も「死」について少しずつ考えが変わって来ます。
人の「死」は終わりではなくてまた新たな誕生を意味。
落ちてまた咲く花のように人間も死んでまた生まれ循環するの。



2010 花雨
3300X2500X1300
LED電球
Flash, Photoshop
桜の木、花びら

一般的な「死」のイメージは暗い、例えば雨が降ったり、曇り空などを表現として使用する事が多い。
しかし、思い返してみると、死の場である葬式のとき、
空は美しく、花が咲き乱れる状況がとても印象的でした。
あの日に見上げた青い空の中で、落ちてる花びらを見て様々な事を考えました。
人が死んだ日は、現世では葬式をする日だけれども、どこかの世界では生まれる日、
すなわち誕生日となるのではないかと思います。
美しすぎる日が私には悲しすぎる日。
この世界では葬式だけど、どこか　の世界では誕生日。
生があるから死がある事。生＝死　だと考えます。
「花雨」は桜が落ちてまた咲くという循環をモチーフです。

星雨
Star Rain
"Where are we from and where are we going"
" Our tear becomes a star, the dead are going back to a star"
「我々はどこから来てどこへ行くのだろう」
「我々の涙は星になるし亡くなって人々は星に帰る」



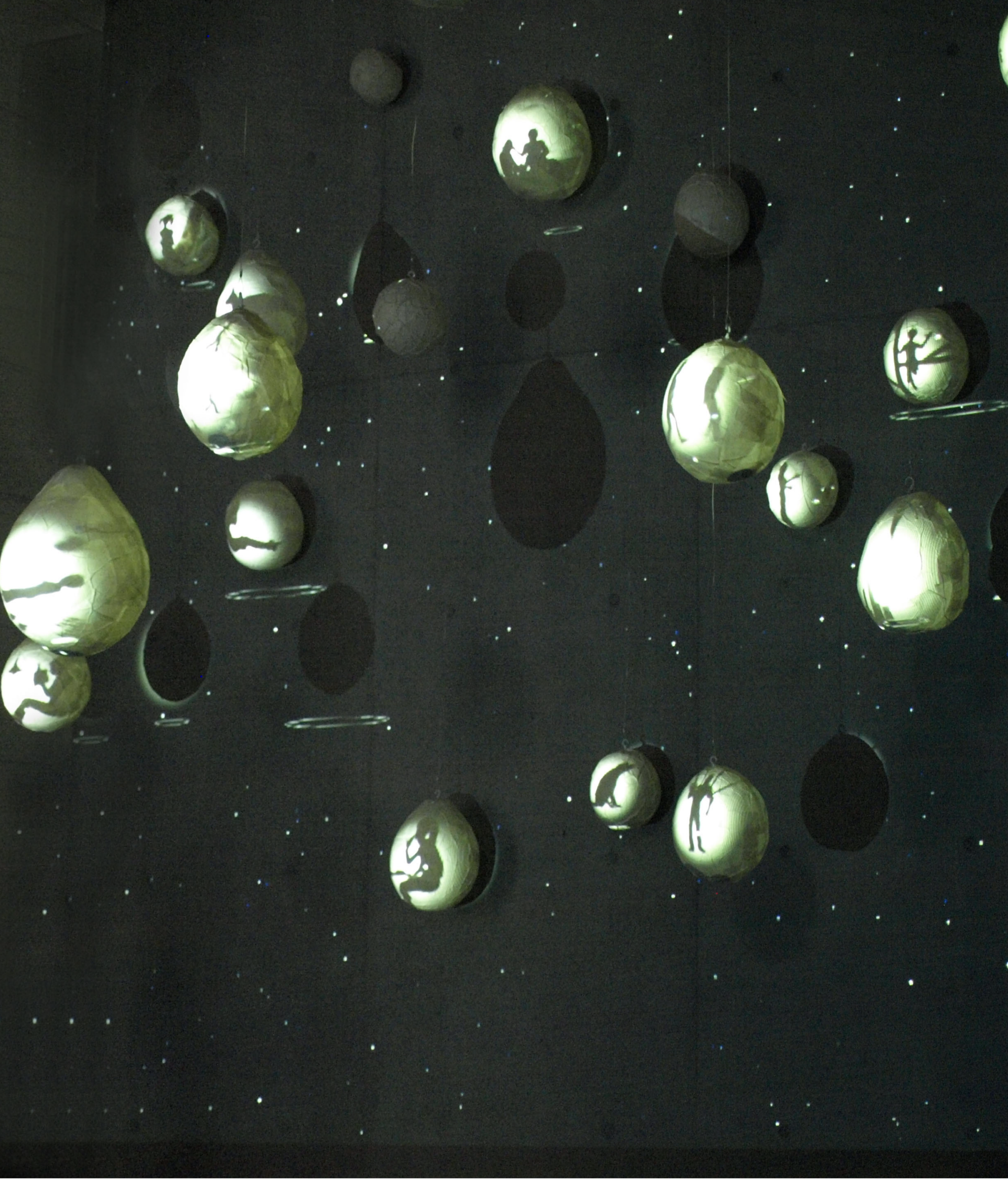
あるアンケートによると亡くなった後、
墓に持って行きたい物の1位がケータイだ
という統計があります。
死んだ後も家族と話したいからという理由。
もう手遅れであると言う現実。

「人は亡くなっても、それが終わりでは
なくて、どこかで生きているから大丈夫だよ。
だから、心の中で話せるよ」という話。

私はその言葉にとても救われました。
それで思い出を、
私がまだ誰にも言っていない話をしよう、
そう思い立って制作したのが「星雨」です。

白いオブジェ「滴」を一つ一つ作りながら
私の心も徐々に落ち着いていました。
そうしてこの作品のテーマは
「人が死ぬと星になる」という、
死んでも心の中で話せるという意味。

「星雨」というタイトルは「雨が降ると、
いつやむか心配にはなるが、
いつかは晴れる」という意味で付けました。



作品の白い滴は灯をモチーフにしています。
韓国では、一般の提灯は様々な色のものがあるが、亡者の提灯だけは色がないです。
死んだ人が元の世界に帰る時、道を明るくするために白い提灯を使います。
「愛する人が帰る時の道を照らす」という意味です。

その上にまた映像も黒白で影、亡者を象徴。
映像一つ一つの映像は死んだ人々と生きている人々の物語。
亡くなった人たちがどこかへ向かってる姿、不思議な時計の中で走っている姿、
毎日忙しかったサラリーマンが都市から逃げる姿等様々な物語を含んでいます。
鑑賞者は作品の中につつまれて観賞することができる。鑑賞者の周りすべてが物語となります。